



Title	カルチュラル・スタディーズの理論と実践(3) 序言
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2003, 2002
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序 言

この言語文化共同研究プロジェクトは、これまで2年つづけて大阪大学言語文化部・言語文化研究科から刊行された『カルチュラル・スタディーズの理論と実践』と『カルチュラル・スタディーズの理論と実践Ⅱ——ポストコロニアルとグローバリゼーション——』の試みを継承するものである。それらの「序言」でも触れた通り、これらの論集は、言語文化部・言語文化研究科の教官と大学院生をおもなメンバーとして1996年に活動を開始したカルチュラル・スタディーズの研究会CSC（Cultural Studies Circle）を母胎としている。ただし今回は、研究対象の切り分けという理由もあり、そのメンバーの一部は、本論集と同時に刊行される『アメリカ文化研究の可能性』に寄稿することになったことを付言しておく。

今年の論集のサブタイトルは「帝国の文化とポストコロニアル文学」とした。これも大筋において昨年の「ポストコロニアルとグローバリゼーション」という関心を引き継ぐものである。9.11事件から現在のイラク戦争にいたる流れのなかで、アメリカ主導による世界の「秩序維持」の問題がクローズアップされつつある。しかし、このような世界状況を準備したものが、少なくとも過去5世紀以上に及ぶ、近代西洋世界による非西洋世界の支配の歴史であったことも否定できないだろう。このような歴史とそこからの脱却の可能性を、イギリスや日本の帝国の文化、また、カリブ、アフリカ、インド、サモアなどの旧植民地が生み出してきたさまざまな文学表現を通して見極めること、それが今回のプロジェクトの究極的な狙いといえる。これまでの論集と同様、読者からの忌憚のない反応が得られたら幸いである。